

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## A Century of Uilta (Orok) Reindeer Husbandry on Sakhalin Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 紘一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001201">https://doi.org/10.15021/00001201</a>

## サハリンのウイルタ（オロッコ）における トナカイ飼育の百年

井上 紘一

### 1. トナカイとトナカイ飼育

1970年代後半には、地球上に棲息するトナカイが約500万頭を数え、その65%が飼育されている個体、そして35%は北米のカリブーも含めた野生トナカイと推計されていた（Semenov-Tjan'shanskij 15; 井上 1981: 127）<sup>1)</sup>。トナカイの飼育化がいつ始まったかは不詳であるものの、それが北方ユーラシアで出来たことは確実である。アメリカ大陸からは、トナカイ飼育が自生的に成立したことを証する事例が報告されていないからである<sup>2)</sup>。旧世界のトナカイに関する限り、就中、シベリアや北ロシア、スカンディナヴィアでは、飼育トナカイの総数が、最近の2世紀を通して、野生トナカイのそれとほぼ反比例の関係にあった。シベリアにおける産業開発や環境破壊、さらにはソ連の崩壊やそれに引き続く経済的混乱の結果、トナカイ飼育では今や、遺憾ながら全般的な衰退が認められる<sup>3)</sup>。昨今のシベリアでは、飼育トナカイと野生トナカイが、いずれも絶滅の危機に瀕している（井上 1998: 11-13）<sup>4)</sup>。

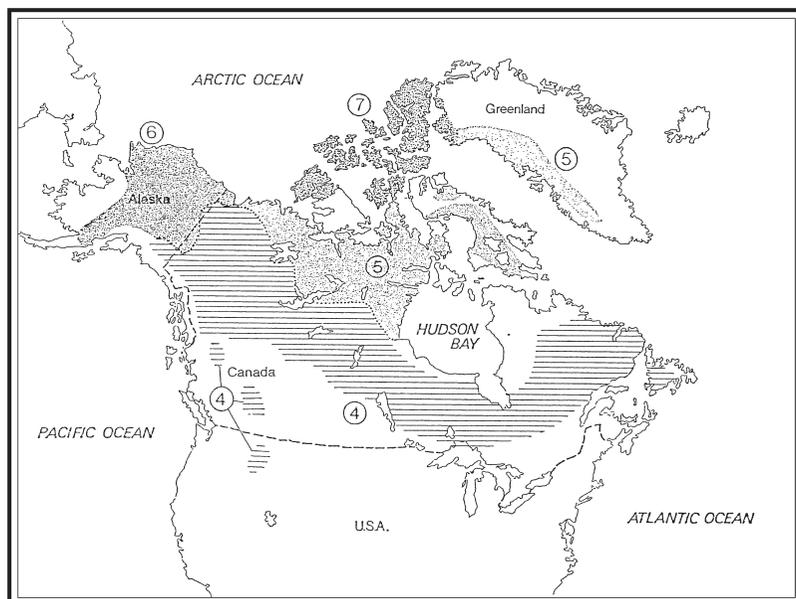
トナカイ (*Rangifer tarandus*) は、家畜として肉や毛皮、運搬手段など、人間が生き延びるために必須の便宜を完全なセットで提供してくれる、シカ科 (*Cervidae*) の動物では唯一の「属」である。低温と極めて苛酷な環境（タイガやツンドラ）に対して究極的な適応を遂げたトナカイは、北方の荒野において人間の生活を支えてきた。

飼育トナカイと野生トナカイはいずれも、その棲息域にもとづき森林群とツンドラ群という、ふたつの下位集団に区分される。前者は、より暗色系の色調を呈する高身長で瘦身の胴体に加えて、長い四肢を有することがその特徴である。一方、後者を特徴づけるのは、明色系の色調、やや小柄で頑丈な体躯、より短くて太目の四肢である（井上 1998: 132-135; Sergejev 40, 54）。したがって、トナカイ飼育にも、森林型とツンドラ型というふたつの類型が設定される。前者に従事する森林の狩猟民は、冬季狩猟の遠征に利用する目的で限られた頭数（世帯当たりの平均頭数20~30頭）のトナカイを飼育する。冬にはトナカイ橇が用いられる。冬季以外でも、サヤン山地のトファラル、トゥバ・トジャ、北モンゴルのツァータンや、ツングース系の狩猟民（井上 1993: 112-113）はトナカイに騎乗する。サヤン山地では、騎乗に際してトナカイの背に置いた馬鞍が使用されるが、ツングース系狩猟民<sup>5)</sup>は、トナカイの肩甲骨上にクッション状の座席（これは依然として「鞍」と称される）を載せて、それに跨って騎乗する（図1）<sup>6)</sup>。ところで、ツンドラ型はまた「トナカイ遊牧」とも呼ばれる。これはつまり、ひとつの飼育チームが



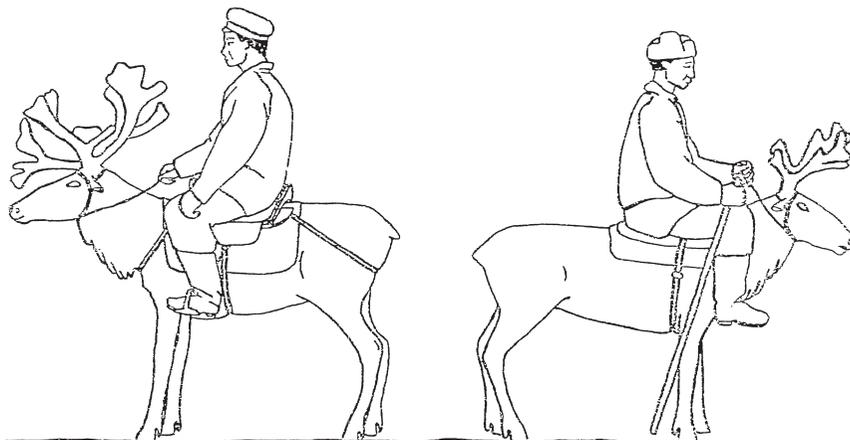
地図1 北ヨーロッパとシベリアにおけるトナカイ (*Rangifer tarandus*) の分布 [G.K. Whitehead 1972: 95]

- |                                      |                          |
|--------------------------------------|--------------------------|
| 1. <i>Rangifer tarandus tarandus</i> | ノルウェーからロシア               |
| 2. <i>R.t.fennicus</i>               | ロシア・ヨーロッパ部：カレリアからサハリン島まで |
| 3. <i>R.t.platyrrhynchus</i>         | スピッツベルゲン島                |



地図2 北米におけるトナカイ / カリブー (*Rangifer tarandus*) の分布 [G.K. Whitehead 1972: 35]

- |                             |                     |
|-----------------------------|---------------------|
| 4. <i>R.t.caribou</i>       | カナダとアラスカ南東部         |
| 5. <i>R.t.groenlandicus</i> | グリーンランドとカナダ         |
| 6. <i>R.t.granti</i>        | アラスカ半島              |
| 7. <i>R.t.pearyi</i>        | 北西グリーンランドとそれに隣接する島嶼 |
- その他の2亜種 (*R.t.dawsoni* と *R.t.eogroenlandicus*) は絶滅した。



1. サヤン方式

2. ツングース方式

図1 トナカイ騎乗の2方式 [S.V. Vajnshtejn 1971 から借用]

膨大な頭数のトナカイ（5,000～10,000頭）を管理するからであり、あたかもモンゴル系やテュルク系の遊牧民が、家畜の大群を率いて広大な草原や砂漠を遊弋するが如く、彼らもトナカイの大群とともに無辺のツンドラを遊動する。ツンドラ型のトナカイ飼育は、自家消費ならびに交易のために食肉を確保することを目的とする（井上 1993: 112-113）。

## 2. サハリン島におけるトナカイ飼育

ロシアと日本の両帝国が島の殖民をめぐる鏖戦を削り始める19世紀半ばまで、サハリン島ではニヅフ（ギリヤーク）、アイヌ、ウイльта（オロッコ）という3種の原住民族が、歴史的に成立した独自の生活圏に住み分ける形で暮らしていた。

北サハリンの東西両岸には、漁撈や海獣狩猟を主生業とするニヅフの集落が点在する傍らで、島の南半部を占めていたのは狩猟・漁撈民の樺太アイヌである。ウイльтаは両者に挟まれる形で、主として北半部においてトナカイ群を逐いつつ狩猟生活を送っていた。これらの3民族は生業を異にするだけでなく、それぞれの母語さえも相異なる系統に属している。すなわち、ニヅフが大陸在住の同胞（アムール・ニヅフ）とともに古アジア系の言語を、またアイヌはアイヌ語樺太方言をそれぞれ母語とするのに対して、ウイльтаの母語は、隣接するアジア大陸に広く分布するツングース諸語のひとつであった。

かかる独自の生活圏を、これら3民族がいつ頃から確保してきたかは依然として不詳であるものの、ニヅフとアイヌが島の北部と南部とに、自前の生活圏を既に確立してい

表1 ウイルタの人口変遷

年	Total/persons/	Northern Sakhalin	Southern Sakhalin/ 南樺太
1897	749	445	304
1904	524	278	246
1926	415	157	258
1929	428	146	282
1931	478	154	324
1989	341	164	177
1990	320	144	156
1992	301	138	173

既知のデータのうち、南北両サハリンの人口がそろって得られる場合のみを採用した。  
情報源：Roon 1996: 11 に加えて、若干の日本語刊行物も参照。

たところへ、ウイルタの祖先が大陸から渡島して、両者の間へ楔状に割って入ったものと想定しても大過ないであろう（井上 1993: 105-109）。

ウイルタの伝統的トナカイ飼育は、森林型の1変異と見ることができる。彼らは一定のルートを辿りながら、通常はひとつの川筋に沿って、海辺の夏の牧地（ここに定住して海獣狩猟や漁撈に従事）と山のなかの越冬地（ここでは定住することなく冬猟に専念）の間を、年周期で往還していた（井上 1993: 112; Roon 1994: 109-112; 1996: 61-63; Vasil'jev 6-7 *passim*）。このような海から山への往還は、ツンドラ型に特有の現象であるとはいえ、後者の遠大なマイグレーションとは違って、寧ろ森林型の季節的往還、つまりヨーロッパのアルプス地方に見られるような「移牧」（*transhumance*）に類似する、かなり短距離の旅であった。しかも、彼らが保持するのは小規模なトナカイ群（世帯当たり高々20頭）（Vasil'jev 9）<sup>7)</sup> であって、群れは決まって特定の父系出自集団（ウイルタ語で '*hala*' と称されるいわゆる氏族）の成員からなる遊牧チームによって管理された。牧夫らは全てのトナカイに十分な訓練を施した上で、冬場に橇を引かせ、夏には騎乗した。女たちは新生獣の介護を担当し、母獣の乳を搾った。したがって、家族の全員を包摂する飼育チームは、家族ぐるみで非定住生活を送っていたのである（井上 1993: 112; Roon 1994: 116-117——とりわけ女の役割に関する考察）。

1897年に帝国の全域を対象として実施されたロシアで最初の国勢調査は、ウイルタの総人口を749（男性395、女性354）人と記録している（Patkanov 983）。当時のサハリンは、全島がロシアの統治下にあった事実<sup>8)</sup> を特記しておきたい。爾来、とりわけ1905～1945年の40年間、ロシアと日本が同島を分割統治し、したがってウイルタの人々も両国の間で分割されたため、実人口の把握は困難を極めるが、ウイルタ人口は着実に減少の一途を辿り、1989年の最新の国勢調査によると、その総数は341人を記録するに至る（*Itogi...* 1990）<sup>9)</sup>（表1）。

上述したウイルタの伝統生業は、ソ連の集団化政策が彼らのトナカイ飼育に対して推

表2 トナカイ頭数の変遷（コルホーズ‘Val’ とソフホーズ‘Olenevod’）

年	‘Val’	‘Olenevod’ (総頭数)	情報源
1938	1,470		Roon: 160
1939	1,649		<i>ibidem</i>
1947	4,099		GASO [f. 62, op. 1, d. 496a, l. 52]
1949	4,694		Roon: 160
1957	5,000		GASO [f. 62, op. 1, d. 496a, l. 52]
1959	7,000	11,872	Roon: 160/ GASO [f. 62, op. 1, d. 539a, l. 2]
1960		12,781	GASO [f. 62, op. 1, d. 539a, l. 2]
1961		12,370	<i>ibidem</i>
1962		13,651	<i>ibidem</i>
1963		14,706	<i>ibidem</i>
1964		13,699	<i>ibidem</i>
1965		14,886	<i>ibidem</i>
1969	12,414*		Novitskaja: 2
1972	13,009*		<i>ibidem</i>
1974	14,565*		<i>ibidem</i>
1975	12,297*		<i>ibidem</i>
1978	1,200		Roon: 162
	11,000*		Novitskaja: 2
1979	9,000*		Novitskaja: 2
1980	3,687*		<i>ibidem</i>
1991	1,200		Roon: 164
1996	800		<i>ibidem</i>
1999	1,787*		Novitskaja: 2
2000	840*		<i>ibidem</i>

\* の付された数字は、‘Val’での飼育頭数ではなくて、‘Olenevod’の頭数も包括する総頭数であろう。これには「半野生トナカイ」も含まれる公算が大である。

出典：Roon 1996: 160, 164; Novitskaja 2000: 2; GASO [サハリン州国家文書館]。

進された1930年代初頭まで、北サハリンでは辛うじて維持されたものと推定される<sup>10)</sup>。興味深いのは、1930年代末に南樺太（日本統治下にあった北緯50度線以南のサハリン島南半部）ではトナカイ飼育が廃業を余儀なくされた（Roon 1996: 159）のに、北サハリンの東岸では発展を続けて、1950年代末までは「繁栄を謳歌した」という事実である。北東海岸に設置されたトナカイ飼育コルホーズ（集団農場）で飼育されていたトナカイの頭数に関する限り、少なくともその数値は年ごとに着実な増加を重ねて、1950年代末には7,000頭に達したと報告されている（表2）。

本稿では、ウイлтаのトナカイ飼育の発展と衰退とを絞るため、1930年代から1950年代までと、1960年代以降の、ふたつの時期を設定して、それぞれの時期を産業開発や政治・経済改革との関連で考察する。

### 3. 「繁栄する」トナカイ飼育（1930年代から1950年代まで）

北サハリンにソヴィエト権力が初めて樹立されるのは、1920年以降同地を保障占領していた日本軍が撤退する1925年5月のことであった（Stephan 99, 107; Hara 60, 65）。日本軍は、1920年1月から5月にかけてアムール河口のニコライエフスクで出来した、いわゆる「尼港事件」で蒙った損害<sup>11)</sup>への補償を要求して北サハリンを占領し、軍政を敷いていたのである。1925年の日ソ基本条約で規定された撤兵にかかわる協約<sup>12)</sup>にもとづき、日本はソ連から、サハリン島の鉱物、木材その他の天然資源の開発利権を獲得する。

基本的には、これが北サハリンの東海岸に所在する油田の産業開発における序幕である。かくて、当該地域におけるほとんど唯一の住民であったウイльтаやニヴフやエウエンキ<sup>13)</sup>もまた、これ以降は「近代」と直面し、その渦のなかに巻き込まれることを余儀なくされた。では、まずサハリンにおける石油産業の歴史を概観しておこう。

#### 3-1. 産業開発の発端

バヴロフ (Filipp Pavlov) という名のヤクート人が、北東サハリンの（現オハ市近傍の）川辺で瓶に採取した「黒い水」を、イヴァノフ (Ivanov) というニコライエフスクの商人のもとに届けるのは、1879年の出来事であった (Leonov *et al.* 84)。イヴァノフは翌年、化学分析のため試料をモスクワへ送った。試料が石油と同定されたとの報に接するや、彼は直ちに、北サハリンで探査と試掘を実施すべく1,000デシャチナからなる区画の開発利権を求めて、ロシア皇帝に陳情する。しかるに、イヴァノフはその後間もなく死亡するため、1888年に利権を獲得したのは、彼の相続人のひとりであるゾートフ (Gregorij Zotov) 退役中尉である。ゾートフはオハとノグリキで試掘を開始するが、少なくとも彼の存命中には何らの成果も得られなかった (Leonov *et al.*: 84; Panov 39-40; Stephan 93; 岡 132-133)<sup>14)</sup>。

そこで1880年は、サハリンの石油が科学的に同定された年と見做すことができる。とはいえ、原住民の人々がそれを「燃える水」「臭い水」として夙に識別していたことは、記憶さるべきである。ニヴフのシャマンらは「荒々しい踊りの最中にこの水を焚き火に振り撒く」という、その効果的利用法を発明していたとすら報じられている。「火は消えるどころか、鮮烈な炎を上げて燃えさかった」 (Leonov *et al.* 84) のである。

その後、北サハリンの東海岸には、いわゆる地質学者や鉱山技師と称される、一攫千金を夢見るロシア人や外国人の山師があまた殺到する。にもかかわらず、彼らの努力がしかるべく報いられることはほとんどなかった (Stephan 93; 岡 132-133)。

スマトラ島で石油探査に従事したのち、1892年にサハリンへ来島して山師コンペに加わったドイツ人技師のクライエ (Friedrich F. Klaye) は、ヌートヴォとボタシノで首尾

よく試掘を展開したようである。しかしながら、彼もまた資金不足や頻発する内輪もめに苦しんだ揚句、志半ばで没する。彼の息子が相続した開発区画は、第1次世界大戦が勃発した1914年、敵国性資産として没収された(岡 134-135; Leonov *et al.* 85)。

ある日本人へサハリンが埋蔵する石油資源に関する耳寄りな情報を告げたのは、まさにこのドイツ人技師にほかならない(松尾 79-80)。日本の久原鉱業がこの話に並々ならぬ関心を寄せた。日本人に北サハリンでの石油調査を可能とする(I. スタヘイエフ商会との間で結ばれた)協定に基づいて、久原鉱業は1918年、「北樺太資源調査」と銘打つ調査隊を北サハリンへ派遣する。調査隊の成果は極めて有望なものであったから、久原鉱業は翌19年、日本政府の後援を得て「北辰会」というコンツェルンを結成する。これには、三菱鉱業、日本石油、寶田石油、大倉鉱業という鉱業系大手4社も参画している(松尾 81; 岡 137-138; Stephan 98-99; Hara 57-58)<sup>15)</sup>。

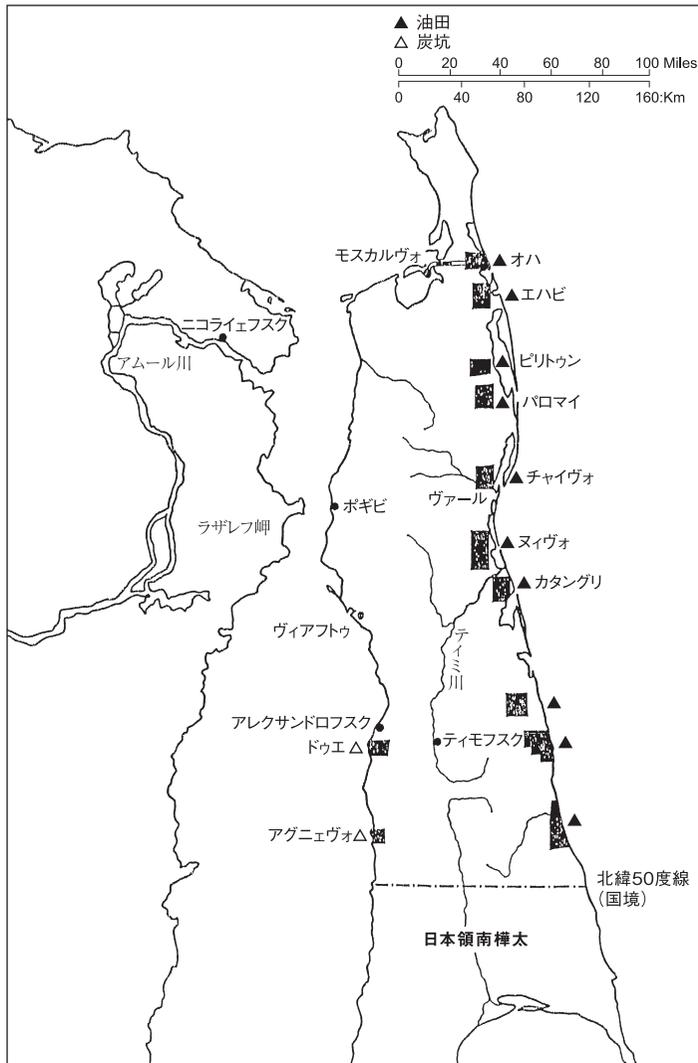
1919年、「北辰会」の調査隊が海軍の舟艇で北サハリンへ派遣されたにも拘らず、翌20年1月に「尼港事件」が勃発したため、同隊は北緯50度の日露国境線を越えて陸路南樺太への撤退を余儀なくされた(松尾 81-82; Hara 59)。「北辰会」にとっては幸運なことに、1920年の日本による北サハリンの軍事占領<sup>16)</sup>は、コンツェルンが石油調査を再開することを可能とした。「北辰会」は1922年オハに「オハ鉱業所」を開設するが、早くも翌23年には同地で最初の自噴井を掘り当てることに成功する(松尾 83; 岡 138)。

その間、外交関係を樹立するための日ソ交渉は、日本による北サハリン占領の終結をめぐる暗礁に乗り上げるも、紆余曲折の末、ソ連は日本企業にソ連で鉱物資源を採掘する開発利権を供与する一方、日本軍は定められた期日までに占領地域から撤兵することで、最終的な合意が達成される(日ソ基本条約は1925年1月に調印された)(Stephan 105-106; 岡 64-70)。上述のように、日本はこの公約を履行した。しかるのちに、開発利権の詳細をめぐる交渉が改めてモスクワで開始されて、例えば、石油開発利権の年限を以下のように規定する、日ソ間の協定が締結される。

日本側は、8鉱区(オハ、ヌートヴォ、ピリトゥン、エハビ、チャイヴォ、ヌイヴォ、ウグレクウティ、カタングリ)で11年間の探査と45年間の試掘を行う開発利権を獲得する。これらの鉱区は何れも基盤目状に区画されて、日本側には柵目がひとつ置きに割り振られる(Stephan 132; 岡 73-74; 松尾 84-85)。

これらの開発期限にもとづくと、日本の開発会社は1970年までその利権を行使することも可能であったろう。日本側はそこでコンツェルンを解散して、1926年には改めて「北樺太石油株式会社」という国策会社を発足させるに至る。しかしながら、同社は1944年までしか存続しなかった(Stephan 132; 岡 73-74; 松尾 84-85)。

ところで、1925年にはソ連側もまた、石油開発の先進地域であるバクー、グローズヌイ、マイコブから、地質学者や技師、熟練労働者のチームを北サハリンへ呼び寄せて、



地図3 ソ連期のサハリンと日本の開発利権地区（1925-1944）[J.J. Stephan 1971 から所引]

自前の石油開発事業に着手する。ロシア人のなかには、技術的ノウハウを入手する目的で派遣されて、日本の利権会社に勤務する者もあった（Stephan 129. 参照 Leonov *et al.* 86）。第1次五カ年計画が始まる1928年には、オハに国営企業「サハリン石油トラスト」が創設されて、自前の石油生産に着手している（Leonov *et al.* 86; Stephan 133）<sup>17)</sup>。かくして、20年足らずという短期間ながらも、北サハリンの油田開発をめぐる日ソ間の協力と競争<sup>18)</sup>が開始される。米国の歴史家ステファン（John Stephan）はサハリン近代史を叙述する自著のなかで、日本の利権会社が創業ではロシア企業に数年先んじたものの、1932年にはソ連の「サハリン石油トラスト」が、石油の総生産高において日本企業を

表3 サハリンにおける石油産出量の推移

年	会社名 北樺太石油株式会社 (年産量) (百万トン)	サハリン石油トラスト (日本への年間売却量) (百万トン)	サハリン石油トラスト (年産量) (百万トン)
1926	34,000		
1927	77,000		
1928	122,000		
1929	184,000	28,000	28,000
1930	193,000	37,000	?
1931	189,000	113,000	?
1932	188,000	134,000	210,000
1933	195,000	125,000	?
1934	164,000	123,000	?
1935	168,000	40,000	?
1936	181,000	40,000	?
1937	151,000	100,000	356,000
1939	?		473,400
1940	?		505,500
1942	?	0	550,000
1943	16,000	0	590,000
1944	0	0	650,000

出典：岡 1942: 151–152; Lebedev: 188–190; Moore 1945: 141.  
Stephan 1971: 134; ステファン 1973: 157 から転載。

凌駕することに成功した (表3を参照), と記している (Stephan 136)。

探査や試掘の飽くなき努力が実って、日本の利権会社に割り当てられた、オハからカタングリに至る北東海岸の全域で石油の埋蔵が確認された事実は、特筆に値しよう。他方で、多くのウイльтаのインフォーマントが近年語ってくれたところによると、彼らの祖先が伝統的に利用していたトナカイ牧地は、ウルクト湾からナービリ湾にかけて立地していたという。オハがウルクト湾に、またカタングリはナービリ湾に所在するから、両地域は事実上重なりあっている。彼らの伝統的生業活動の場は、不幸にして油田の分布域とちか合っていた。とはいえ、原住民とその小規模なトナカイ群が広大な領域にまばらに散居する間は、石油開発をめぐる活動もトナカイ飼育にさしたる影響を与えなかったと思われる。利権会社がかかなり大きな油田を開発した場所は、容易に回避することができたからである。

加えて、石油の探査や試掘に従事する人々にとって、原住民はむしろ有益な人材を提供した。まず第1に、彼らは自らの生まれ故郷を完璧に知悉し、石油埋蔵地に想定されるアスファルトの湖や「燃える水」の泉に関する情報にも精通するから、掛け替えのないガイドであった (Leonov *et al.* 86; Panov 39–40)。第2には、個々の石油探索者に対して、彼らは食料 (魚やトナカイ肉) を提供することもできた<sup>19)</sup>。そして、第3ながら勝るとも劣らず重要であるのが、とりわけウイльтаやエウエンキのトナカイ牧夫は、——夏はトナカイの背に積んで、また冬場は橇に載せて——機材や物資の運搬も請け負

えたという事実である。その当時、これ以外の運搬手段は皆無であった。しかも北サハリン東海岸は、オホーツク海に面するとはいえ、オハの立地するウルクト湾を別にすると、大型船の接岸可能な場所も皆無であった。こうした状況は、ジープやダンプ、無限軌道車、はたまたヘリコプターのような、近代的輸送手段が同地に導入される1950年代末まで、ほとんど変わることがなかった<sup>20)</sup>。

ここでは、石油開発におけるトナカイの利用を証する事例をひとつだけ紹介する。スターリン期の弾圧がピークを迎える1937～1938年、相当数のウイльтаやエウエンキの牧夫が日本のスパイとして逮捕・告発され、銃殺された。彼らは、東海岸に設置されていたトナカイ飼育専門の4コルホーズのメンバーであったため、これらのコルホーズは労働力に不足をきたして、遂には、そのひとつ（「ヴァール」）に吸収合併されることになる<sup>21)</sup>。この悲劇はウイльтаのインフォーマントから聴取したものであるが、逮捕された牧夫たちは、日本の北樺太石油会社の委託で運搬に従事しただけに過ぎなかったという<sup>22)</sup>。彼らの運搬請負は1950年代末までしばしば必要とされてきたから、同様の請負業はそれ以前から実践されていたと想定すべきであろう<sup>23)</sup>。

### 3-2. トナカイ飼育コルホーズ

ソ連における集団化は、北サハリンにソ連の支配が確立された1925年以降、拍車がかげられた。したがって、農業と漁業の両セクターでは集団化が直ちに着手された（Mushkareva 173-175）。しかしながら、共産党の指導者らが原住民に対して集団化政策を推進するためには、数年を要した。サハリンにおけるトナカイ飼育の集団化の嚆矢は、1931年、西海岸のヴィアフトゥに創設されたトナカイ飼育専門ソフホーズ（国営農場）である。「オレネヴォド」（トナカイ飼育民）と命名された同ソフホーズには、エウエンキの牧夫らが動員された。翌1932年には、東海岸在住のウイльтаの人たちを総集する形で、ふたつのコルホーズ（「ヴァール」と「ナービリ」）が組織される。やや遅れて、ノグリキ近傍にエウエンキのコルホーズ「クラスヌイ・トゥングース」（赤いツングース）、そしてダギ川流域には「レーニン・ホクトリン」（Lenin Hoktlin = レーニンの道に沿って）も設置される（Roon 1996: 159-160）。

2000年9月、1932年生まれの牧夫長老マカロフ（Anatolij N. Makarov）<sup>24)</sup>は筆者との面談のなかで、東海岸における集団化の情景を次のように語った。

ノグリキで原住民大会<sup>25)</sup>が招集されて、オハからナービリにかけて在住する家族でトナカイを所有する者はすべて統合されることが決議された。そこで、ふたつのコルホーズ「ヴァール」と「ナービリ」が創設され、各家族のトナカイ群は大きな群れに統合されることになる。各家族はトナカイを共同で使用し所有すべく、自らのトナカイを「自発的に」拠出する。各家族は能力に応じて財産を寄付することができるという、拠出の原則があったからである。つまり、富める家族はより多くの、そして貧しい家族からはより少なく、トナカイの拠出が

求められたわけである。言い換えると、それぞれの牧夫が個人的に使用する完璧に訓練されたトナカイは、「個人」の所有物として手元に残すことができた。「さもなくば、どんなコルホーズもやっては行けまい」と、マカロフは明言する (井上 2002: 293-294)。

上述の通り、「スターリン期の弾圧」に起因する労働力不足の結果、ふたつのコルホーズ「ナービリ」と「クラスヌイ・トゥングース」は 1938 年「レーニン・ホクトリン」への統合を余儀なくされる。後者もまた、その後に「ヴァール」に統合されてしまう。こうして、「ヴァール」は唯一の現役コルホーズ、すなわち、東海岸におけるトナカイ飼育の拠点となるに至る (Roon 1996: 160)。

上述の悲劇や、その後に繰り返された改革にも拘らず、コルホーズ「ヴァール」は着実な発展を遂げて、トナカイの総頭数に関する限り、1938 年に 1,470 頭 (そのうち 1,187 頭がコルホーズ所属、287 頭は個人所有)、そして 1939 年には 1,649 頭 (同様にそれぞれ 1,336 頭と 313 頭) という、目覚ましい成長を達成する (Roon 1996: 160)。ヴァールでは 1938 年、例えば夕刻になると文盲撲滅の授業などが行われた、「赤いチュウム」(伝統的な円錐形テント) のすぐ脇に 3 戸の住宅が建ち並び、1 軒の浴場も建設中であった。子供らは、ノグリキに特設された「インテルナート」(寄宿制初等学校) で学んでいた<sup>26)</sup>。これは、シベリアとロシア北方の至るところで、この時期に原住民の間で見られた典型的なシナリオ (Sergejev 457; Gurvich 1961-4: 47, 53)<sup>27)</sup> であって、「資本主義を経ないで実現される、原始共同体から社会主義への移行」、「二千年を飛び越える飛躍」といった政治スローガンで謳われていたものである。

周知のように、その主たる目標は、原住諸民族の間に社会主義的生産様式を確立させ、彼らを啓蒙するとともに、ゆくゆくはロシア化を招来することにあつた。加えて、ウイльтаやエウエンキなどのような非定住民に対しては、彼らを定住生活に移行させることが重点目標となった (Sergejev 455-459)<sup>28)</sup>。したがって、ヴァールにおける定住集落の建設は明らかに、その方向を目指した 1 事例である。

それはとも角、上述の道を追求した「ヴァール」は、そのコルホーズ時代の 20 余年 (1932 ~ 1958) にトナカイ飼育をかなり発展させることができた。その事実を、当該時期に「ヴァール」で飼育されたトナカイ頭数の着実な増加を示す数値が物語っている (表 2)。成功は、一連の要因の総体によって説明さるべきであるようだ。まず第 1 に、人々がソヴィエト権力を、北サハリンで 5 年に及んだ日本の軍政からの解放者として受け入れた際の全般的高揚感、そしてまた社会主義が約束する薔薇色の未来に対する期待にも帰せられるべきであろう。第 2 には、「社会主義的競争」や、それに基づく報奨制度といったソ連式の経営スタイルが、非定住民の個人主義者としてのメンタリティと合致していた。しかも、賞与はしばしばトナカイの仔獣で支払われた (井上 2002: 294)。第 3 点として、コルホーズの経営陣に獣医や育種専門家、医療スタッフが配備されたことも、重要な要因として指摘される (Gurvich 1961: 47)。まさにこれは、新規に導入さ

れた「近代」の恩恵に他ならない。第4に、定住集落や幼稚園、寄宿制学校の建設やその後のメンテナンスといった、コルホーズのインフラストラクチャーの整備に対して、国家は莫大な投資を行った。第5には、国家が広大な面積の牧地に独占的利用権を付してコルホーズに分与した。「ヴァール」には実際に、北サハリンの東半部においてサヴォ川からナービリ湾に至る幅広い帯状の牧地が分与された（井上 2002: 298）。そして最後まで、負けず劣らず重要な要因として、伝統的には父親から花嫁として購入されるのが慣わしとされていた女たち（井上 2002: 297-299）<sup>29)</sup>に、コルホーズは正式のメンバーシップを付与して、彼女らが遂行する仕事に対して賃金を支払うことで、女性解放にも寄与した事実が強調されねばならない。女たちは従来どおり、依然として母獣の乳搾りや新生獣の介護に従事するとはいえ、これらの労働に対する賃金を受け取り始めたのである。女性が社会主義的競争で勝者となることも珍しくなかった（Roon 1996: 159; 井上 2002: 294）。したがって、彼女らもまたトナカイの頭数を増やすことには大いに貢献していた<sup>30)</sup>。さらには、第2次世界大戦中に召集されて前線へ赴いた牧夫に代わって、女や子供たちが彼らのトナカイ群をいかに首尾よく守り抜いたかという物語が、ウイルトの古老の間では今なお語り継がれている（井上 2002: 293）。

しかしながら、あまたのサクセス・ストーリーにも拘らず、この時期は不幸の種も胚胎していたことが指摘されねばならない。ここで特に問題となるのは、家族が崩壊したり、トナカイ飼育の知識が世代を超えて継承されなくなることを惹起した、定住化政策と寄宿舎制教育であるが、これらの問題については後述する。

## 4. トナカイ飼育の衰退（1960年代以降）

1958年、西海岸のヴィアフトゥに立地するトナカイ飼育ソフホーズ「オレネヴォド」はコルホーズ「ヴァール」を吸収合併して、後者はヴァールにおけるソフホーズの1部門、すなわち「ヴァール支部」へと改組された。こうして、いわゆる「ソフホーズ期」（1958～1991）と称される、新しい時代が開始する。その間、石油や天然ガスの開発は、技術の進歩や国家投資の増強によって、長足の成長を遂げた。新油田が続々と発見され、開発されていく一方で、古い油田もまた島の全域で再開発された（Leonov *et al.* 89-90）。東海岸で油田開発が酷となる1970年代には、石油やガスの埋蔵が突き止められた土地の利用をめぐる、開発者とソフホーズの間で紛争が頻発した。その際には、ソフホーズ側が否応もなく譲歩を強いられたから、勝者は常に開発者であった（井上 2002: 297; Roon 1999: 42）<sup>31)</sup>。

### 4-1. 石油開発の発展

本節では、ウイルトの伝統的牧地が所在する東海岸で示された、開発者の行為や行動

を纏めて叙述する。

1970～1980年代には、モンギ、ミルゾイエヴァ、ダギなど、一連の油田がヴァールからノグリキに至る海岸一帯で集中的に開発された (Roon 1996: 42)。この関連で、サハリンの民族学者ローンは次のように記している。

「膨大な領域の森や湿地が切り開かれて、重車両のための仮設道路や車庫が建設された。掘削機械や労働者用住宅を作業現場へ輸送すべく、多数のトラクターも投入された。相当数の埋蔵地が発見されたので、掘削の現場には多数のポンプや原油貯蔵庫が建設され、「タイガ」を貫いてパイプラインも敷設された」(Roon 1996: 42)。

上の記述からも明らかなように、石油開発は、採掘現場やその周辺のみならず、探査や試掘の作業によって、また連絡道路やパイプライン、関連施設の建設を通じて、広範な周辺地域に至るまで環境破壊をもたらした。さらには、頻繁に誘発された森林火災が、莫大な規模の焦土帯を創出していった。

したがって、かつてはコルホーズ「ヴァール」のトナカイ群にとって素晴らしい夏の牧地であった、ヴァールからノグリキにかけての海辺に展開する森林や湿地は、完全な砂漠と化した。当然ながら、牧地は完璧に失われて、飼育班は廃業を強いられた (Roon 1996: 42)。トナカイの一部は別の群れに収容されたものの、過半は逃亡するか、そのまま放置された。逃亡するか放置されたトナカイは次第に野生化してゆき、彼らだけで個別の群れを形成するようになるが、これらは「半野生」群と称された。「半野生」トナカイ群<sup>32)</sup>は、石油開発が進捗するなかで、その頭数を増大させていった (井上 2002: 297-299)。

1970年代の末頃、チャイヴォ湾を望む広大な丘陵に、ソフホーズの「ヴァール支部」をその後背部に包摂する形で、巨大な産業複合体が忽然と姿を現した。この複合体は、ほど遠からぬ東海岸で新たに開発された油田群との関連で建設されたもので、80年代にその規模を拡大していった。そこでは本部棟ビルを中心として、生産施設、高層ビルの林立する労働者用アパート群、そして、それぞれが別個の居住域を形成する、石油探査者や原住民の一戸建て住宅群が、あたかも群島のように配置されている。複合体のなかでは最古参であるにも拘らず、「ヴァール支部」はその裏側の一隅で、ほんの小さな部分を占めるに過ぎなくなった。今日では複合体の全域がヴァールと呼ばれるため、「ヴァール支部」は今や「古いヴァール」とか、あるいは単に「ソフホーズ」とも通称されている (Roon 1996: 164)。

1990年、初めてヴァールを訪れた筆者は、現代の遺跡とも形容すべき巨大な産業複合体の廃墟を目撃することとなる。域内は人影もまばらで、往時の繁栄を偲ばせる景観ばかりが目につく。産業複合体自体は開店休業に追い込まれていた。これは、当時のソ連で展開されていたペレストロイカ政策の「負の影響」でもあったが、それ以上に、同

複合体が近隣の油脈を採取し尽くした結果であった。陸上の資源は枯渇してしまったのである。

1990年代になって、6件の開発プロジェクト（サハリンⅠ-Ⅵ）からなる、大陸棚石油・ガス鉦区開発のための新しい総合計画が、突如として発表される。とはいえ、計画そのものは、1970年代から検討されてきたのも事実である。

ピリトゥン・アストフ鉦区とルーニ鉦区の開発を担当する「サハリンⅡ」プロジェクトは、特に速いテンポで展開され、先陣を務めている。その関連で1998年8月には、ピリトゥン湾の沖合い16キロの地点に「モリクパック」（‘Molikpaq’——掘削地点の海底に立てられた石油採掘用プラットフォーム）が設営されて、1999年7月、試験操業を開始している（村上隆17）。同プロジェクトの開発計画によると、採取された原油は、まず「モリクパック」から至近の陸上地点までパイプで運ばれたあと、近い将来には、最南端のコルサコフ・ターミナルまで東海岸に沿って敷設されるパイプラインで搬送されることになっている（井上2002: 266; 村上17-19）。パイプラインの敷設ルートは既に確定されており<sup>39</sup>、目下はそのために必要な（新道の建設も含む）道路整備が進捗中と伝えられる。

#### 4-2. ソフホーズから共同組合へ

コルホーズ「ヴァール」のソフホーズ「オレネヴォド」への統合は、関係する人たちが自身のイニシアティブで行われたのではなく、行政命令によるものであった<sup>39</sup>。当時のフルシチョフ政府は経済改革を打ち出しており、小規模で利潤を上げえぬコルホーズは大型のソフホーズへ統合されるか、あるいは合同合併して十分に大きいソフホーズを創設することが指示されていたのである（Roon 1996: 161）。この指示はソ連の全域に向けて発せられたから、サハリンのケースはその1事例に過ぎなかった。にもかかわらず、同改革は生産性と利潤率の向上や、高水準の商品生産の実現を目標としていたのであるから、少なくともサハリンの事例は、改革それ自体の非妥当性を立証するものであった。何となれば、その目標は決して達成されることがなかったからである。

1960年代の初頭、「ヴァール支部」はヴィアフトウのソフホーズ首脳部から、「チュクチ方式」の導入を指示される（Roon 1999: 41; 1996: 161）。「チュクチ方式」とは、チュクチの牧夫らが自らのトナカイ飼育（ツンドラ型）の実践のなかで得られた知恵と経験をもとに編み出した、トナカイ飼育の1方式である。サハリンの文脈ではそれが、1) 大規模群の管理、2) 「自由出産」の慣行を導入せよという、ふたつの訓令を意味していた。

第1の訓令によって、現有の4飼育班が2班に半減され、当然ながら牧夫の働き口も削減されることになる。解雇された人たちは「タイガ」を去って、コルホーズ「ヴァール」の発祥の地であり、また30年間近くその本部でもある定住集落のヴァール村で暮

らすことを余儀なくされる (Roon 1999: 41; 1996: 161)。

さらにドラスティックな結果を招いたのは、第2の訓令である。上述のように、新生の仔獣は専ら女たちによって介護されてきたが、この伝統ははまだコルホーズにあって守られていた。この関連で伝統的に女の仕事とされたのは、出産の立会い、出生直後から始まり、春から秋にかけて忍耐強く励行される仔獣の繋留、そして搾乳である (Roon 1999: 41; 1996: 159)。女の努力はかくて、その後実施される訓練や、人とトナカイの親密な関係の基盤を整備するものであった。

「自由出産」の訓令は、不幸にして、女たちにその伝統的役割の履行を禁ずるものであった。失職した女たちもやはり「タイガ」を去って、ヴァール村で暮らすことを余儀なくされる (Roon 1999: 42; 1996: 161)。

「自由出産」制が導入された最初の春には、早くも新生仔獣の大量死が始まる。それ以降、仔獣死亡率が上昇し続けて、トナカイは繋留することも訓練を施すことも、ますます難しくなる。人とトナカイの関係も目に見えて冷却した。トナカイは人間を避け、剩え恐れるようになって、次第に野生化を深めていった (Roon 1999: 42; 1996: 162)。しかしながら、1990年代における筆者自身の観察による限り、ウイльтаのもとで成立している人とトナカイの関係は、何れもツンドラ型のトナカイ飼育に従事するヤクーチヤのエウエンヤ、西シベリアのヤマル・ネネツ自治管区のコミにおけるよりも、遥かにより親密である。

因みに言えば、政府の定住化政策は「チュクチ方式」の採用によって、その推進が著しく容易となった。(多数派をなす婦女子に一部の成人男子も加えた)ウイльта人口の過半がヴァール村に定住するようになる一方で、限られた数の牧夫は周年「タイガ」に留まって、トナカイ群の管理に当たった。不可避的に生じたのが、頻発する家族の崩壊<sup>35)</sup>である (Roon 1996: 163)。他方で、彼らの経済状況が徐々に悪化していった。ローンの記すところによると、「これら全てが食肉生産の利潤低下をもたらした。肉の価格は下落したのに、生産コストは高騰した。しかも、運搬手段として地質探査者から当てにされてきたトナカイの需要もなくなった」(Roon 1999: 42)。

東海岸では石油開発がノグリキまで展開され、ヴァールではそれに並行して石油産業複合体が造成された1970年代以降、同地の原住民は、その人的環境と社会・経済環境のいずれにおいても、ドラスティックな変化を体験することとなる。

ヴァールでは原住系対非原住系の住民比率が、——1938年の95%対5%から1996年の15%対85%へと——急激に変動し、定住集落の創設者であった原住民の人々は、ロシア語の話者からなる多数派に包囲されるようになる (Roon 1992: 135)。原住民家族の家庭で話される言葉がロシア語に取って代わられるのに、長い時間は要しなかった。ウイльта語もエウエンキ語も、学校で教えられることはなかった<sup>36)</sup>。ひとつ家族のなかで、就中、祖父母と孫たちの間では、共通の言葉を欠くような事態が多発する。女たちは進

んで、ロシア語を話す非原住民系の暫定居住者、通常は石油産業の従業員と、事実婚の関係をとり結んだ。村における快適な「近代」生活に親しみすぎた彼女らは、牧夫との結婚に頗る消極的となったという。その結果、「タイガ」に留まる牧夫はしばしば、未婚者であり続けることを強いられた。かかる状況は、原住民環境の実質的なロシア化の過程を著しく促進したのである<sup>37)</sup>。

「ヴァール支部」がソフホーズ期（1958-1991）に達成したトナカイ飼育の成果については、残念ながら、刊行資料や新聞記事から得られる、かなり限られたデータしか利用できていない。ヴィアフトゥカ行政中心地のアレクサンドロフスクに保管されていると想定される、ソフホーズ「オレネヴォド」にかかわる基本文書は、遺憾ながら未参照である。とはいえ最近では、「ヴァール支部」に関する文書が意図的に廃棄されるか焼却された、という見解すら取り沙汰されてもいる（井上 2002: 109-110）。したがって、インフォーマントから直に聴取したフィールド・データは、依然として、われわれにとって重要な情報源である。

この時期は概ね、ソ連後期のいわゆる「停滞期」に当たっている。この命名は「ヴァール支部」についてもやはり合致するようである。トナカイ飼育もまた、大なり小なり石油開発の発展と関連する、牧地の大規模な喪失や環境汚染などといった、人為的破壊から重大な影響を被っていた（Roon 1999: 42-43）。その間には、いわゆる「半野生」トナカイ群の急速な成長が、飼育されてきた個々のトナカイの大いなる犠牲のもとに達成されていった（井上 2002: 297-298）。そこで、われわれが唯一推定できるのは、「ヴァール支部」で飼育されていたトナカイの総頭数が、年を追って減少したに相違ないという想定である。唯一入手できた1978年の数値は1,200頭である（Roon 1996: 162）<sup>38)</sup>が、ヴァールで集団化が開始されたばかりの1938年の数値（1,470頭）にほぼ匹敵する水準である。まさにこの故に、ヴァールにおけるトナカイ飼育の集団化は、1990年代初頭の公式解体を待つまでもなく、1978年には既に挫折していたとの想定が可能となるわけである。

1991年、ソフホーズ「オレネヴォド」が解体されて、「ヴァール支部」は独立の「国営小企業ヴァール」へと改組された。名称は一新されたにも拘らず、経営構造は元の儘であった<sup>39)</sup>。以前と同じ赤字体質を継承した新企業は、国庫からの補助金が停止された1996年には休眠企業とならざるをえなかった<sup>40)</sup>。同企業の従業員として取り残された約10名の牧夫は、無給社員となったわけである。各自は、自らの生存を賭けてそれぞれに進路を模索することを余儀なくされた。その際に、最長老の牧夫マカロフが選択した進路は特筆に価する。逆境にも拘らず、彼は自らの飼育チームに数名の親族の若者を引き入れて、トナカイ頭数を増やすという賭けに打って出た。これは、万難を排してトナカイ飼育を保持すべしという、自らの堅い信念に裏付けられての行動であった<sup>41)</sup>。

1999年、若手エウエンキのポリソフ（Aleksandr N. Borisov）が「国営小企業ヴァール」

の社長に選出された。1969年ヴァール生まれのボリソフは、休暇になると「タイガ」に赴いては牧夫の手伝いに励むなかで、その少年期を過ごしたという。その後、漁業会社に勤務してビジネスの世界で経験を積み、海軍で兵役を勤めたボリソフは、牧夫らがトナカイ飼育を復活させて、さらに発展させるのを支援せねばならぬ、と「清水の舞台」から飛び降りるような決断をして帰郷する。社長としての初仕事は、赤字企業「ヴァール」を解体し、残された11名の牧夫を創立会員として、「ヴァレッタ」(Valetta)<sup>42)</sup>と命名する「民族生産共同組合」を新たに発足させることであった(井上2002: 82-90; Novitskaja 2)。彼は「ヴァレッタ」を2000年に設立する(Lajgun: 315)<sup>43)</sup>。

ボリソフは現在、当初コルホーズ「ヴァール」に分与されたものの、その後に登記がソフホーズ「オレネヴォド」へ移されてしまった牧地を、共同組合「ヴァレッタ」へ取り戻すことに邁進している。ある土地が蒙った損害の補償を要求するとき、その土地の所有権(少なくとも占有権、つまりその土地の独占的使用権)の確保は、死活的に重要である。したがって、ウイльтаの人たちをして「ヴァレッタ」の設置に踏み切らせた要因のひとつは、まさしく大陸棚での石油開発にほかならぬと言っても、決して過言ではなからう。

## 5. 結びに代えて

2002年8月、われわれはロシア連邦林業局のノグリキ林業事務所(Noglikskij Leskhoz)を訪ねて、ガブルスカヤ(O.N. Gabrusskaja)所長と懇談する機会に恵まれた。主たる話題は、サハリンでトナカイ飼育にかかわる牧地を全て包摂する森林の、所有権に関する問題であった。予想したとおり、彼女は以下のように頗る明快に言い放った。

「いわゆるトナカイの牧地は、総体として国家に帰属する。その1片といえども、私人や法人に譲渡移転されたことはない」。

しかるに、その後に彼女の口をついて出た発言は、われわれを一驚させた。ソ連の石油開発会社、つまり国営企業が自然環境に損害を与えた場合、会社はその都度、国家に対してしかるべき額の補償金を支払ってきており、それは今なお継続されている、と言うのである。彼女は、そのような1事例にかかわる文書ファイルさえ、われわれの閲覧に供してくれた。われわれが驚いたわけは、トナカイ牧夫たち、とりわけマカロフから「石油開発会社側は頻発した牧地破壊に対して、彼らに補償金を支払うことは一切なかった」という苦情を、しばしば聞かされていたからである。困みに、マカロフは、ひとつの国営企業が別の国営企業に補償金を支払うような事態は馬鹿げているとして、そのような支払いはずりありえないことを堅く信じている(井上2002: 108)。

これに先立って、われわれはユジノ・サハリンスクで、民族有限会社「オレネヴォド」、つまりソフホーズ「オレネヴォド」の後継企業の社長を務める、エウエンキの起業家マーチェヒン (V.V. Machekhin) と対話する機会があった。彼はサハリン狩猟管理局を相手に、同局の怠慢から生じた「半野生」トナカイの喪失に対して補償請求する訴訟を、まさに起こそうとしていた。これら「半野生」トナカイは、かつてソフホーズ「オレネヴォド」が所有していたから、今では自分の有限会社の資産であるというのが、その論拠である。ところで、彼の会社は目下トナカイを1頭も所有せず、したがってトナカイ飼育には従事していない。但し、近い将来にはその再開を期しているという。彼はまた、ノグリキに自社の支部を設置することも計画している。マーチェヒンはどうやら、恐らくは旧コルホーズ「ヴァール」の牧地も含めて、旧ソフホーズが管理していた牧地の全域に対する占有権を主張することを通じて、かつての領域におけるソフホーズの復活を目論んでいるように見受けられる。

もしそうだとすると、「ヴァレッタ」は、自らのトナカイ群が長期にわたり継続して牧草を食み続けてきた牧地の占有権をめぐる、「オレネヴォド」社と争うこととなる。その際、「オレネヴォド」社が「ヴァレッタ」にとって侮りがたいライバルとなることは、火を見るより明らかである。牧地の占有権にかかわる現行登記は、後者ではなくて前者の名のもとになされているからである。

ウイлтаのトナカイ飼育は1世紀にわたって、全世界を巻き込んだ産業化と近代化の波に翻弄される形で、発展や衰退を繰り返す波乱に満ちた道を歩んできた。高度に原始的で、技術的にも低水準にとどまりながら、しかも少数の人たちによって支えられてきた生業に過ぎないウイлтаのトナカイ飼育が、「近代」への適応という「茨の道」を生き抜いてきた事実は、20世紀の奇跡のひとつと言ってもよからう。

ウイлтаの人たちは、トナカイ飼育が保持される限り、自分らも生き続けるであろうという。この意味において、ウイлтаと彼らのトナカイ飼育が、直面するさまざまな難関を克服できることを、願ってやまない。

## 注

- 1) 全地球的なトナカイの分布状況は、ホワイトヘッドの著作から転載した「地図1」(北方ユーラシア)と「地図2」(北米)を参照されたい(Whitehead 95, 35)。トナカイの分類はA.W.K. バンフィールドによる(Banfield 1961)。
- 2) 1891年、当時アラスカの教育監であったジャクソン(Sheldon Jackson)はトナカイ飼育をアラスカに移植することを試みた。そのために北アラスカと西アラスカのエスキモーが、指導員として特別に招聘されたチュクチやサーミのトナカイ牧夫のもとでトナカイ飼育を習得すべく動員される。その一方で、飼育用のトナカイはシベリアから、のちにはスカンディナヴィアからも購入調達された。この試みは、1932年の最盛期に60万頭のトナカイを数えるところまで発展、1979年の時点でも22のトナカイ群を擁したにも拘らず、原住民の間に新しい

- 生業として定着させるには至らなかった (岡田 120-130; Davis 793-794)。
- 3) 日本人による関連労作として、葛野浩昭 1990; 齋藤晨二 1996; 2000; 佐々木史郎 1999; 池谷和信 1999; 2002; 高倉浩樹 1998; 1999; 2000; などがある。
  - 4) この点に関して例外をなすのが、ヤマル・ネネツ自治管区に見られる持続可能なトナカイ飼育。筆者は 1997 年に同管区でコミの事例を観察する機会があった (井上 1998: 11-13; cf. Yoshida 2001)。
  - 5) トナカイ飼育に従事するツングース系集団はかつて、‘Murchen’ (mur = a horse) と呼ばれた馬飼育集団との対比で ‘Orochen’ (ツングース語で ‘oro/oron’ は飼育トナカイを意味する) と称された。但し、歴史的に使用された民族名 ‘Orochen/Orochon’ は必ずしもトナカイ飼育民を意味しない。
  - 6) ヴァインシュテインの著作に所載の原図 (Vajnshtejn 1971: 38) を転載。
  - 7) しかしながら、1902 年にチャイヴォ湾のヴァール (Val——現在の Val 村を指すものと思われる) を訪れた英国人旅行家ホーズによると、同地には「世界で最も金持ちの男」、あるいはウイльта語で「フィジク」と呼ばれるサハリンの「ファンデルビルト」(Vanderbilt——米国の鉄道王) が住んでいて、兄弟とともに 70 頭以上のトナカイを所有していた (Hawes 216-217)。
  - 8) サハリンは 1855 年以降、日露両国の共同統治下にあったが、1875 年のペテルブルグ条約によってロシア帝国の領土となる。同条約はサハリン島と千島 (クリル) 列島の交換を定めたもので、ロシアが前者を、そして日本は後者をそれぞれ領有することとなる。
  - 9) 同書では、ウイльтаという民族名が登記されず、ウイльтаは “Oroki” と “Orochi” という「誤った」2 呼称のもとに集計されている。
  - 10) 1928 年の夏、B.A. ヴァシリエフが東海岸でフィールド調査を実施したとき、ウイльтаの生業活動にはある種の文化変化が既に認められたとはいえ、伝統がいまだよく維持されていた (Vasil'jev 1929: 3-22)。したがって、彼のフィールド報告は今なお、ウイльта民族誌に関する基本文献のひとつである。
  - 11) 約 700 名に上る日本人犠牲者のうち、少なくとも 110 名の軍属と 12 名の民間人はボリシェヴィキ系パルチザンによって虐殺された (Hara 62)。
  - 12) ステファンンの著作に付載されている日ソ基本条約によると、「議定書 A」3 条は撤兵完了の期限を 1925 年 5 月 15 日と規定している (Stephan 199)。
  - 13) エウエンキのサハリン到来の時期については、オホーツク海沿岸のウダ管区で天然痘が猛威を奮った 1860 年代初めに同地から来島したという所説 (Patkanov 1000) や、1870 年代末葉 (Vasil'jev 10)、あるいは 19 世紀の終わり頃 (Roon 1996: 16) とする説など、諸説がある。
  - 14) 彼の死後の 1910 年、オハにおけるゾートフの試掘区で自噴井が掘り当てられた。最初の自噴井を記念して「ゾートフの井戸」と命名されたこの井戸が、少なくとも 1942 年までは保存されていた (岡 134)。
  - 15) 「北辰会」は当初から海軍と深いかわりがあり、その事業展開は、石油資源を渴望していた日本の国家意志を代行するものと見るのが自然である。
  - 16) 原暉之はこの軍事占領の政治的文脈を詳細に分析している (Hara 60-65)。他方で、ロパチョフもまた同じ歴史をめぐって、ソ連の視座から詳細に論じている (Lopachev 137-156)。
  - 17) ムシュカレヴァは、サハリン石油トラストが 1927 年 9 月 12 日に設立されたと述べている (Mushkareva 172)。
  - 18) 本稿が報告された 2 年後に、北大スラブ研の前同僚村上隆教授が博士論文『北樺太石油コンセッション 1925-1944』(北海道大学図書刊行会、2004 年刊) を上梓された。同書はまさに「日ソ間の協力と競争」を活写する作品である。村上教授はこれを死の床で擱筆され、公刊直後

に他界された。合掌。

- 19) 例えば、ホウズはチャイヴォ湾のヴァールで1902年、粘り強い交渉の末、ウイлтаの牧夫から「トナカイの腰肉」を購入することができた (Hawes 219)。
- 20) 1998年、ヴァールでのフィールドワークで聴取。ヘリコプターに関してはレオノフらの著作を参照 (Leonov *et al.* 88)。
- 21) 1991年、ヴァールでのフィールドワークで聴取 (参照 Roon 1996: 160)。
- 22) 2002年6月、ヴァール村のウイлта女性から札幌にて聴取。
- 23) 2000年9月、ウイлтаの牧夫長老マカロフ (Anatolij N. Makarov) から、次のような解説を拝聴した。「輸送請負でも稼いだものさ。50年代のサハリンには交通手段が皆無じゃった。60年代にはすでに機械が現れたが、それまではコルホーズが創設された30年代以降、輸送の手段はなかったのさ。コルホーズは輸送を引き受けて、それでも収入を得た。オハからノグリキへ向かう橇や、ノグリキからオハを目指す橇で、ほぼ200台が稼動していたな。賃料はコルホーズの収入となった。地質調査隊などにも雇われて、夏も冬も働いたものさ。コルホーズは大きな収入を上げておったよ」(井上 2002: 295)。
- 24) アナトリー・マカロフ氏は2003年、志半ばでヴァール村にて病死した。合掌。
- 25) 原住民大会は第1回が1930年2月、そして第2回は同10月に開催されている (Sergejev 304; Grant 164, 170)。マカロフがいずれの大会に言及しているかは不詳。
- 26) ある畜産専門家がサハリン管区行政部土地局に提出した業務復命書より。この復命書はサハリン州国家文書館に収蔵されている (*f.* 516, *op.* 1, *l.* 4) が、ここではローン氏の著書 (Roon 1996: 160) から所引。1920年代の後半、シベリアの各地に16の「クリトバーザ」が北方委員会によって設置されるが、そのひとつは1929年にサハリン島のノグリキに設営された (Sergejev 262-265; Mushkareva 181; Grant 164)。「クリトバーザ」(‘kul’tbaza’ は ‘kul’turnaja baza’ = 「文化基地」を縮約した合成語) はソ連の行政組織の正式名称で、汎用の社会サービスセンターとして機能した。設置目的は、原住民の定住化政策を推進する際にその受け皿となることであった。ノグリキでは、「診療所、2階建ての寄宿制学校、読書室、スタッフ用住宅3戸、倉庫、冷蔵舎、犬舎、数軒の交易所、そして地区の氏族評議会や共産党、コムソモール、新聞発行所の個別オフィスからなっていた。…獣医診療所の建設が計画されていた」(Grant 164)。
- 27) グルヴィチ論文の英訳も参照されたい。
- 28) ソ連の代表的な民族学者 I.S. グルヴィチは1961年、定住化政策が北方で推進さるべき国家的課題であるとさえ記している (Gurvich 1961: 53)。
- 29) ホウズはウイлтаの男たちから購買婚に関する言説を記録している。「(鉄の) 針はかつて、ひとりの妻を買えるほどの価値があった。しかるに今日では、配偶者の値段がナルタ (橇) 1台と13頭の曳き犬チームに匹敵する」(Hawes 221)。ここでの話題が婚資であるのは明白である。
- 30) 1926~1927年に実施された(極北)センサスにもとづいて、セルゲイエフは次のように記している。「最も成功した情況は、オロッコ (すなわちウイлта) のもとで観察される。ここでは年間の頭数喪失率が、新生獣の総数に対して僅かに4.3%、トナカイ群全体に対しては0.3%にすぎなかった」。これらの数値は、対応するネネツの数値 (48.4%と12.3%) やチュクチのそれ (42.5%と12.8%) と比べて、またコリヤークの数値 (20.4%と12.8%) と比較しても、格別に低率であることが判る (Sergejev 48)。
- 31) 両者は何れも国営企業であり、したがって土地利用者としては対等である。一方、土地の所有は国家が合法的に堅持し続けている。

- 32) ところで「半野生」群は、現代サハリンのトナカイ飼育のひとつの弁別特徴をなしている。そのユニークさは、3種の相異なる範疇のトナカイ——すなわち、頗る少数の「野生」トナカイ、多数を占める「半野生」トナカイ、顕著に減少してしまった「飼育」トナカイ——の、島における共存に求められるからである。1990年代、ピリトゥン湾とチャイヴォ湾の間の沿岸部に「半野生」トナカイのための「オレニー禁猟区」(‘zakaznik Olenij’)が設置されたにも拘らず、サハリンの当局者はライセンスを取得したハンターにそこでの狩猟を許可した。これはつまり、これらのトナカイを「野生」トナカイ、すなわち国有財産と認定したからである。密猟もまた、他の地域におけると同様、ここでも猖獗を極める。その結果、「半野生」トナカイの頭数は著しく減少した(井上 2002: 292, 299-300; Roon 1999: 43)。
- 33) 2000年9月、ユジノ・サハリンスクでのウスペンスカヤ (Je.A. Uspenskaja)・サハリン・エナジー社 PR マネジャーとの面談にて聴取。
- 34) サハリン州国家文書館 (Gosudarstvennyj Arkhiv Sakhalinskoj Oblasti, Juzhno-Sakhalinsk —— GASO) の所蔵する下記の文書はこれを裏付ける。「ロシア連邦政府決定 (no. 841——1958年7月25日付) に基づき、ロシア連邦農業省訓令 (no. 386——1958年8月4日付) に従い、サハリン州執行委員会決定 (no. 278——1958年8月7日付) によって実施された、ソフホーズ〈オレネヴォド〉も含めた州の7コルホーズの再編成は、経済的に脆弱なコルホーズの土地を犠牲にする形で進められた。1958年、コルホーズ〈ヴァール〉と〈ノーヴィ・ブーチ〉(新しい道)はソフホーズ〈オレネヴォド〉に統合され、それぞれを基礎としてふたつのソフホーズ支部、すなわち〈ヴァール支部〉と〈ラングルイ支部〉が発足した」(GASO *f.* 62, *op.* 1, *d.* 496a, *l.* 68)。
- 35) シベリアの常套句は語る、「おかあたちは村にいるのに、おとうらはタイガ、そして餓鬼らはインテルナート」と。
- 36) とはいえ、1980年代後期以降は、ウイльта語の教育が断続的にヴァール村の幼稚園や芸芸訓練センターで、ウイльта自身——幼稚園がフェヂャイエヴァ Irina Ja. Fedjajeva, 訓練センターではビビコヴァ Jelena A. Bibikova——によって試みられている。また1991年以来、ウイльта語の読本や語彙集を公刊するための執筆・編集活動が、池上二良元北大教授やビビコヴァらによって進められている事実は、特筆に値する。しかし残念ながら、いずれも遅きに失したように思われる。もし20年前に開始されていたならば、全く異なる結果であったろう。ウイльта語の初級教本は構想から17年後の2008年3月、遂に陽の目を見ることとなった (Ikegami *et al.* 2008)。
- 37) 1991年、ヴァールでのフィールドワークで聴取。
- 38) ノヴィツカヤ (N. Novitskaja) の新聞記事に引用された文書館データ (表2で\*の付された数字、例えば、1978年の11,000頭)には、「半野生」トナカイの頭数も算入されていることが明らかである。これはまた、当時のコルホーズ首脳部が「半野生」トナカイを自らの所有物と見做していたことも示唆する。
- 39) 1991年、ヴァールでのフィールドワークで聴取。
- 40) 1998年、ヴァールでのフィールドワークで聴取。
- 41) 1998年と2000年、ヴァールでのフィールドワークで聴取。
- 42) ウイльта語で「ヴァール川流域に住む人たち」を意味する。ボリソフ氏は、マルタ島にも同名の町がある、と言って破顔された。
- 43) 「民族生産共同組合ヴァレッタ」は2007年12月、遺憾ながら解体された。

## 参考文献

Banfield, A.W.K.

- 1961 A revision of the reindeer and caribou, genus *Langifer*. *Bulletin of National Museum of Canada* 177 (Biological series no. 66). Ottawa.

Davis, J.L.

- 1979 Status of Rangifer in the USA. In Eigil Reimers, Eldar Gaare and Sven Skjenneberg, *Proceedings of the Second International Reindeer/Caribou Symposium: 17–21. September 1979: Rorøs, Norway*. Part B. pp. 793–797. Trondheim: Direktoratet for vilt og ferskvanns-fisk.

Grant, B.

- 1995 Nivkhi, Russians, and others: The politics of indigenism on Sakhalin Island. In S. Kotkin and D. Wolff, *Rediscovering Russia in Asia: Siberia and the Russian Far East*. pp. 160–171.

Gurvich

- 1961 Илья С. Гурвич, О путях дальнейшего переустройства экономики и культуры народов Севера (北方諸民族の経済と文化のさらなる変革の道について), *Советская этнография* 1961(4): 45–57. 英訳: I.S. Gurvich, “Directions to be taken in the further reorganization of the economy and cultures of the peoples of the North,” *Soviet Anthropology and Archeology* 1/2: 22–31.

Hara, T.

- 1995 Japan moves north: The Japanese occupation of Northern Sakhalin (1920s). In S. Kotkin and D. Wolff, *Rediscovering Russia in Asia*, pp. 55–67.

Hawes, C.H.

- 1903 *In the Uttermost East: Being an Account of Investigations among the Natives and Russian Convicts of the Island of Sakhalin, with Notes of Travel in Korea, Siberia, and Manchuria*. London & New York: Harper & Brothers. [New York: Charles Scribner’s Sons (1904); Reprinted by Arno Press, New York (1970); Curzon, Richmond (2000)].

Ikegami *et al.*

- 2008 Дзиро Икэгами, Елена А. Бибилова, Люба П. Китазима, Сирюко Минато, Татьяна П. Роон, и Ирина Я. Федяева, *Уилтадаирису/Говори по уилтински* (ウイльта語で話そう). Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство.

池谷和信

- 1999 「シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8: 1–30.  
2002 「シベリア北東部におけるチュクチの文化変容——チャウンスキー地区の事例から」煎本孝編『北東アジア諸民族の文化動態』pp. 283–317 北海道大学図書刊行会

井上絃一

- 1981 「トナカイと人 (1)」『北方文化研究』14: 109–140.  
1993 Uilta and their reindeer herding. 村崎恭子編『サハリン少数民族』pp. 105–127 横浜国立大学  
1998 「共存のモデルを求めて」井上絃一編『民族の共存を求めて』3: 3–15 北海道大学スラブ研究センター

- 2002 「石油・天然ガス開発の原住民に及ぼす影響」村上隆編『サハリン大陸棚石油・ガス開発と環境保全』pp. 258–305 北海道大学図書刊行会
- Itogi...
- 1990 *Итоги Всесоюзной переписи населения 1989 г.* (1989年の全ソ連国勢調査結果). *Распределение населения по национальности, родному языку и второму языку народов СССР по Сахалинской области.* том I, Южно-Сахалинск.
- Knjazeva *et al.*
- 1960 К.И. Князева (отв. ред.), В.И. Карпенко, В.П. Шумилино, А.П. Цалин, *Сахалинская область* (サハリン州): *Сборник статей.* Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство.
- Kotkin, S. and D. Wolff
- 1995 *Rediscovering Russia in Asia: Siberia and the Russian Far East.* Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe.
- 葛野浩昭
- 1990 『トナカイの社会誌——北緯七〇度の放牧者たち』東京: 河合出版
- Lajgun
- 2001 Надежда А. Лайгун, IV Съезд Коренных малочисленных народов Севера сахалинской области (第4回サハリン州原住北方少数民族大会): Южно-Сахалинск, 29–30 ноября 2000 года, *Известия Института наследия Бронислава Пилсудского* 5: 299–315.
- Lebedev
- П.А. Лебедев, Экономика и культура северного Сахалина в годы довоенных пятилеток (戦前数次の五ヵ年計画の歳月における北サハリンの経済と文化). In Knjazeva *et al.*, *Сахалинская область*, стр. 183–204.
- Leonov *et al.*
- 1974 П.А. Леонов, И.В. Панькин, и И.Е. Белоусов, *Область на островах* (島々からなる州): *Краткий очерк истории, развития экономики и культуры, деятельности партийной организации Сахалинской области.* Второе, переработанное и дополненное издание. Москва: Издательство «Мысль». [1-е издание: Южно-Сахалинск (1970); 3-е издание: Москва (1979)].
- Lopachev
- 1960 А.М. Лопачев, Северный Сахалин в период японской оккупации (апрель 1920–май 1925 гг.) (日本占領期の北サハリン (1920年4月–1925年5月)). In Knjazeva *et al.*, *Сахалинская область*, стр. 137–156.
- 松尾 猛
- 1943 『ソ聯領北樺太』豊原: 北方日本社
- Moore, H.L.
- 1945 *Soviet Far Eastern Policy, 1931–1945.* Princeton, NJ.: Princeton University Press. [Reprinted by H. Fertig, New York (1973)].
- Mushkareva
- 1960 Е.В. Мушкарева, Восстановление и упрочение советской власти на северном Сахалине (1925–1928 гг.) (北サハリンにおけるソヴィエト権力の復活と強化: 1925–1928年). In Knjazeva *et al.*, *Сахалинская область*, стр. 159–182.

村上 隆

- 2002 「サハリン大陸棚の石油・天然ガス開発」村上隆編『サハリン大陸棚石油・ガス開発と環境保全』pp. 3-40 北海道大学図書刊行会

Novitskaja

- 2000 Н. Новитская, Сохранить оленеводство—это значит сохранить народ (トナカイ飼育の保存は民族の保持を意味する). *Знамя труда* (Общественно-политическая газета Ногликского района) no. 69 (30 августа, 2000 г.), стр. 2. Ноглики, Сахалин.

岡 榮

- 1942 『北カラフト』東京：興文社

岡田宏明

- 1976 「アラスカにおけるトナカイ飼育」『北方文化研究』10: 119-132

Panov

- 1905 А.А. Пановъ, *Сахалинь, какъ колонія* (植民地としてのサハリン). *Очерки колонизаціи современнаго положенія Сахалина*. Москва: Типографія Т-ва И. Д. Сытина.

Patkanov

- 1912 Серафим К. Паткановъ, *Статистическія данныя, показывающія племенной составъ населенія Сибири* (シベリア住民の部族構成を示す統計データ). *Языкѣ и роды инородцевъ* (на основаніи данныхъ спеціальной разработки переписи 1897 г.), томъ III: *Иркутская губ., Забайкальская, Амурская, Якутская, Приморская обл. и о. Сахалинь*. (Записки Императорскаго Русскаго географическаго общества по отделинью статистики томъ XI, вып. 3). С.-Петербургъ.

Roop

- 1992 Татьяна П. Роон, Предварительные итоги этнографического изучения ульта северного Сахалина в Сахалинском областном краеведческом музее (サハリン州郷土博物館における北サハリン・ウイльтаの民族学研究成果予報). *Б.О. Пилсудский – исследователь народов Сахалина*. том 1. стр. 134-141. Южно-Сахалинск.
- 1994 Традиционная система оленеводства ульта (ウイльтаの伝統的トナカイ飼育システム). *Краеведческий бюллетень* 1994 (3): 101-139.
- 1996 *Уйльта Сахалина* (サハリンのウイльта): *Историко-этнографическое исследование традиционного хозяйства и материальной культуры XVIII – середины XX веков*. Южно-Сахалинск. 邦訳：津曲敏郎・加藤博文監訳, 永山ゆかり・木村美希共訳『サハリンのウイльта：18-20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学文学研究科 (2005)
- 1999 The Uilta of the Sakhalin Island: Current economic development issues. In *Development and Environment in the North (The Proceedings of the 13<sup>th</sup> International Abashiri Symposium)*, pp. 41-44. Abashiri: Association for the Promotion of Northern Cultures.

齋藤晨二編

- 1996 『シベリアへのまなざし——シベリア牧畜民の民族学的研究』名古屋市立大学教養部
- 2000 『シベリアへのまなざしⅡ——シベリア狩猟民・牧畜民の生き残り戦略に関する研究』名古屋市立大学教養部

佐々木史郎

- 1999 「トナカイ飼育の生産性」松原正毅・小長谷由紀・佐々木史郎編『ユーラシア遊牧民社会の歴史と現在』(国立民族学博物館研究報告別冊 20) pp. 517-540.

Semenov-Tjan'shanskij

1977 О.М. Семенов-Тяньшанский, *Северный олень* (トナカイ). Москва: Наука.

Sergejev

1955 М.А. Сергеев, *Некапиталистический путь развития малых народов Севера* (北方少数民族の非資本主義的發展の道). *Труды Института Этнографии XXVII*. Москва – Ленинград.

Stephan, J.J.

1971 *Sakhalin: A History*. Oxford: Clarendon Press. 邦訳: ジョン J. ステファン 『サハリン: 日・中・ソ抗争の歴史』安川一夫訳, 東京: 原書房 (1973)

高倉浩樹

1998 「脱社会主義下のトナカイ飼育業の再編——東シベリア・北部ヤクーチアの一地域社会の変容過程」『民族学研究』63(1): 19–43.

1999 「レーニン・トナカイと個人トナカイの間で——東シベリア, ベルホヤンスク地域における家畜トナカイの分類・識別・所有をめぐる考察」『国立民族学博物館研究報告別冊』20: 541–586.

2000 『社会主義の民族誌——シベリアにおけるトナカイ飼育の風景』東京都立大学出版会

Vajnshtejn

1971 Самуил И. Вайнштейн, Проблема происхождения оленеводства в Евразии (II. Роль саянского очага в распространении оленеводства в Евразии) (ユーラシアにおけるトナカイ飼育起源論 (II. ユーラシアでのトナカイ飼育拡散におけるサヤン原郷の役割)). *Советская этнография* 1971(5): 37–52.

Vasil'jev

1929 Б.А. Васильев, Основные черты этнографии ороков: Предварительный очерк по материалам экспедиции 1928 г. (オロッコ民族誌の基本特徴: 1928年の調査資料にもとづく予報). *Этнография* 1929(1): 3–22. Москва – Ленинград: Главнаука и Госиздат.

Whitehead, G.K.

1972 *Deer of the World*. New York: The Viking Press.

Yoshida, A.

2001 Some characteristics of the Tundra Nenets reindeer herders of Western Siberia and their social adaptation. In D.G. Anderson and K. Ikeya (eds.), *Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes*. (*Senri Ethnological Studies* 59), pp. 67–80. Osaka: National Museum of Ethnology.

